

金沢大学附属図書館報

## 大学図書館に思うこと

和田 敬四郎

私のような単なる図書館のユーザーだった素人が図書館長を拝命したのはちょうど4年前のことである。何もわからずに、まず勉強したのが図書館学入門（藤野・荒岡，1991）だった。その中に「多くの大学図書館では定年前の教授が館長になり，何もわからぬままに去って行くのが通例だ」と書いてあった。まさに図星である。「そうはならないぞ」と心に密かに決め，図書館学ならぬ，図書館見学に励んだ。アポを取ることもなく，実際に出掛けて行って，見て歩くだけで十分勉強になる。手始めは県立図書館や市立の玉川図書館，それに泉野図書館。他の大学図書館もいくつか学会等を利用して見学した。単なるユーザーとしてではなく，これから図書館の運営に当たらねばと思うだけで，違うものが見えてくるような気がした。外国に出掛けるときも，必ず訪ねた先の大学の図書館に前もって連絡しておき，見学をさせてもらった。英国のバーミンガム大学図書館，ダラム大学図書館（アポに答えてくれなかった），ノルウェーのオスロ大学図書館，オーストラリアのクイーンズランド大学図書館等々である。外国のこのような大学図書館は規模も大きく，金沢大学の図書館など足元にもおよばない。予算額も大きく，職員数も比べものにならない。図書館の予算が，大学の総予算額の何％かを聞くことにしている。私の訪ねた大学では人件費を含めておおよそ2～4％だった。先進諸国の文教予算が国家予算の1％以上なのに，日本の文教予算は0.5％。それと同じことが金沢大学でも言える。しかしながら，世界中どこの大学図書館も程度の差こそあれ，我々と変わらない悩みを抱えていることだけは理解できた。人員不足に資金不足，さらには学術雑誌価格の高騰である。

金沢大学図書館は金沢なりの解決法を探らねばならない。書架を眺め歩いて，一番

不足していると感じたのが学生図書のようなだった。特に新しく購入された書物が少ないようだ。1年間の学生用図書費は文部科学省から来る分を除くとわずか700万円余ほどであった。全国の国立大学を調べてみても，これだけ少ないところは恥ずかしながらX大学以外になかった。早速，学生用図書としてこれくらいは必要ですという購入希望の書籍リストを作り，財務委員会への要求案とした。総額は1億円を超えるものだったと思う。おそらく「何を常識はずれなことを」と思われたことだろう。各部局長当ての手紙も書いた。金沢大学ともあろう大学でこんなことでよいのだろうか。この手紙は実際には配布されないまま，私の手元で眠っている。ありがたいことに，年度末に余った経費を回してもらえようになり，かなり充実させることが出来た。訴えがそれなりに認められたものと思う。

次は電子ジャーナルの問題である。5～6年前から学術雑誌出版業界の寡占化が進行し，大手出版社によって開発された雑誌の電子化が急激に進んできた。電子ジャーナルの購入については図書館はさらに弱い立場にあった。それは現状では電子ジャーナルの価格が冊子体をベースにしたものであり，冊子体の購入・キャンセルは学科や教室で決められ，図書館には全く決定権がないからである。4年前から，国立大学図書館協議会の中に設けられたタスクホースの活動により，コンソーシアムが構築され，それに呼応して文部科学省も動いてくれ，電子ジャーナル（データベースを含む）を買うための費用が一部予算化された（学生図書経費の削減が同時にあり，その関係が取りざたされた）。多くの大学では，それに大学独自の資金を上乗せし，多くの電子ジャーナルの購読を可能にした。この点でも金沢大学は後れをとっている。来年度のE社の電子ジャーナル（フリーダムコレクション

ョン)の導入に失敗した。これはまさに館長の責任だと感じている。まだ教官のなかには、冊子体の雑誌を読むことの方がいいと考えている向きもあるようだ。しかし最近の動きでは、情勢が変わりつつある。米国のハーバード大やコーネル大の図書館でE社のジャーナルを大量にキャンセルするというのである。この動きは全米でかなりのニュースになっているようだ。金沢大学の図書館は周回遅れのトップを走ることになったのではないだろうか。しかしこれからは、図書館の狭隘化の問題や複数の利用者が同時に利用できる点などを考慮すれば、バックナンバー利用権の問題は未解決ではあるものの、電子ジャーナルの導入は避けて通れないだろう。電子体を基本とし、必要ならば冊子体を購入するという新しい価格体系が作られ、必要なものがもっと導入されることを期待する。昔の大学図書館には、仕事をしているのか、していないのか、なんとなくうろうろしている職員が何人もいたという話を聞いたことがある。この人たちは遊んでいたわけでもなく、せっせと図書館の資料を整理し、資料を分析し、研究し、図書館の隅々に至るまで知り尽くしていて、いざというときには大いに役に立っていたのである。図書館のヌシともいべき人たちである。このような人材は余剰

人員と見なされ、ほとんどが削減され、現在ではどこを探してもいない。このような人たちの仕事が無くなったわけではない。いずれの大学図書館でも、おそらく積み残されたままになって、誰にも分からない、誰も手を着けない資料や仕事が山積みされていることだろう。これらは隠れた宝物かも知れない。どのように活かせばよいのか、いまだ私に名案はない。金銭的な効率化だけでは解決できない問題を、どのように解決していくかが今後求められよう。

全国的に読書離れが取りざたされる中、学生諸君に出来るだけ書物を読んでもらうために一計を案じた。入り口近くに「館長お勧めの1冊」コーナーを設け、分野を問わず、“これは学生さんに読んでもらいたい”という書物を短い推薦文と共に並べた。貸出率が高いと聞き、密かにうれしく思っている。1年あまりの間に推薦した書物は10冊あまりである。多忙な合間を縫って私自身がせっせと読んだ思い出は忘れないだろう。図書館を中心とした出会いの場が作られ、そこに人が集まれるようになって欲しい。

大学図書館に学生用図書や参考図書がたくさんあり、多くの電子ジャーナルやデータベースも揃えて、きめ細かいサービスしてくれるスタッフが多い方がいい。開館時間も長い方がいいし、日曜日も開館している方がいいに決まっている。しかし、現実にはむずかしい。このような問題こそ現状を分析して、最も経済的な線を探さねばならない。しかしながら理想に向け一歩でも前進できるように、よりよい大学図書館にするために努力しなければならぬ。国立大学法人がスタートする時期、なおさらだと感じている。

この時期にこのような文章を書かせていただけることに大変感謝している。4年間のことを忌憚なく書かせてもらった。不適切な点があればお許し願いたい。

(前附属図書館長)



「館長 お勧めの一冊図書コーナー」